

—《書評》—

濱田武志著 東京大学出版会

『中国方言系統論

——漢語系諸語の分岐と粵語の成立』

(同志社大学) 中西 裕樹

西洋近代言語学の導入以来、漢語（中国語）の研究者は、広大な国土に分布する無数の話しこそば（speech）を調査し、特徴をとらえ、それに基づいて「分類」することに腐心してきた。F. K. Li（李方桂）が1937年に発表した「8分類（+その他）」が、漢語方言の最初の科学的な分類とされる（J. Norman, *Chinese*, CUP. 1988, p.181）。その後、調査の深化や研究の進展、新たな方言の「発見」等により、多くの議論が蓄積されてきたが、現在では『中国語言地図集』（初版1987年、第2版2012年）の10大方言という区分が一応のスタンダードとなっている。

中国には豊富な文献記録が残されており、言語研究に役立つものも少なくない。しかし、それらは漢字という、音を表さない文字で書かれているために、音韻史を研究するためには、まずは韻書など音によって漢字が分類されている文献を手がかりにして、音を推定することから始めなければならない。その推定に最も成功しているのが隋唐時代の漢字音であり、これを中古音と呼ぶ。中古音は漢語方言の音韻史研究において重要な参照点とされ、漢語方言の「分類」も、推定された中古音から現代各方言への音韻変化を主な基準として行われてきた。

ここに紹介する濱田武志氏の大著は、書名が示すように分岐学の観点から漢語系諸語（Sinitic Languages, 一般には中国語方言Chinese Dialectsと呼ばれることが多い）のうちの粵語（東部と雷州半島を除く広東省全域と広西チワン族自治区東部に分布）と桂南平話（広西チワン族自治区南部に分布）の「系統」を論じたものである。前述の漢語方言「分類」も中古音からの音韻変化を主な

基準としている以上、通時的な観点に基づいていることは間違いない、「系統による分類」などという言い方がされることもある。しかし、本書は「系統そのもの」と「系統に基づく分類」とが本質的に異なる概念であることを明晰に述べる。ある変種と別のある変種とが何を共有し、何を共有しないかという情報から導き出されるものこそが「系統」であるとし、粵祖語の再建と娘言語（daughter languages, ここでは現代の粵語・桂南平話の諸方言を指す）どうしの親疎関係を探求していく。

本書の構成と主な内容は、以下のとおり。

「第1章 漢語系諸語比較研究の意義」では、本書が研究対象とする言語群について概説し、これまでの漢語系諸語の通時的研究のあり方と問題点、そして本書の研究目的が述べられる。

「第2章 粵語・桂南平話の比較研究—先行研究について」は、これまでの粵語資料や比較言語学的研究のみならず、漢語系諸語に分岐学を応用した先行研究や、分岐学ではない理学的な方法を使用した系統論に関する研究をも網羅して紹介・検討している。

「第3章 系統を推定する方法」は、まず漢語の研究史を外観し、その特質・問題点等について、印欧語を随時参照することによって浮き彫りにしている。次に本書の系統推定に基づく分岐学の概要および「系統」と「分類」の違いについて、生物学や印欧語を参照しながら述べる。最後に系統推定の方法論および粵語・桂南平話への分岐学の導入と、それに伴う理論的な問題が論じられる。

著者によれば、より精密な共通祖語の再建のためには、祖語の体系が相当程度わかった上で、祖語から娘言語への通時的变化が形質行列として数値化される必要がある。そこで「第4章 粵祖語の音類を求める—粵祖語の再建初案」では、中古音の音韻体系の枠組みに粵祖語の再建音を対応させた粵祖語再建初案が検討・提案される。

「第5章 分岐学的分析による系統推定」では、

36の娘言語を対象 (OTU [operational taxonomic unit]) に、68の音変化 (主には粵祖語から娘言語への音韻合流) を基準 (形質) として、分岐学的分析が行われ、実際に粵語・桂南平話の系統樹が導き出されている。5つの単系統群を見出したこと、方言分類では独自の地位を持つと考えられてきた「四邑片」というグループに属する諸方言が、系統上は他の方言から大きく離れていないこと等の新たな知見がもたらされた。

「第6章 粵祖語の再建」では、声母・韻母・声調（調類・調値）の別に粵祖語の各「語（字）」の再建形を導き、粵祖語の音韻体系および粵祖語から娘言語への音変化を論じている。調値の再建はとりわけ大きな貢献と言えるだろう。

「第7章 漢語史の中の粵祖語」では、ここまで議論や再建形をふまえて粵語と桂南平話の言語史や粵祖語の漢語系諸語における位置づけについて検討している。介音が見られないことや入声の分裂のようないわゆる粵語的な特徴が、粵祖語以降の時代に並行的に発生した音変化の結果であると推定し、粵祖語の北方漢語からの分岐年代を唐代後期以降、おそらく宋代と結論づける。

「第8章 分岐学的分析の可能性と限界—結びにかえて」では、本書の内容についてのまとめがなされた後に、分岐学的分析を言語史研究に導入するにあたって、広範な先行研究の適切な理解を含めた言語学的・中国語学的な分析の過程の重要性を強調して結びとしている。

附論1では、「各語（字）の再建形、各OTUの形質行列および方言分布図」として言語研究の要とも言えるデータが示され、さらに本書を理解する上で必要な定義・概念・用語等が以下の附論2-4で説明されている。

附論2 数学的概念の定義一覧

附論3 分類と系統的概念的差異について

—コケ植物を例として

附論4 本書の通読に必要な中国音韻学の概

念・用語

なお、附論1にすべての地点の言語データ、および参考とした中古音の再構形が掲載されていないことには若干の不便を感じた。

さて、本書が粵祖語の再建の対象としている「語（字）」とは何だろうか。漢語以外の言語の研究者には奇妙な表現に見えるかもしれないが、中国語学を専門とする者なら、この表記を見ただけで、著者の苦心を理解することができるだろう。この表記について、著者は本文中では何も触れていないが、附論4に次のような記述がある（358-359頁）。

漢字は、1つの音節を表現する文字であると同時に、漢語系諸語の語彙を表記する文字でもある。従って、本来ならば同一の小韻〔引用者注：韻書中の同音字のグループ〕に属する字が、どの時点や地点においてもまったくの同音である保証はないはずである。中古音を参照とする通時的研究は、この点に常に留意せねばならない。語と字とが互いに異なる概念であることを受け入れつつも、語の音の歴史を論ずるには、しかしどうしても字の音の歴史的変化を参照せねばならないことがある。このような事情があるために、本書中では「語（字）」や「字（語）」という、いささか持つて回ったような表現を随所で用いている。

漢語の「語」が単音節であるとは限らず、粵祖語の語構成が明らかになっていない上に、訳語がつけられていない以上、本書の再構形は漢語的な意味での「字」に与えられたものとするのが妥当だと評者は考える。しかしながら、「語（字）」という表記からは、学問に対する著者の真摯な姿勢が余すところなく窺えるのである。

（2019年7月、416ページ、16,000円+税）